全農が原油輸入

オマーン産 沖縄で委託精製

石油製品を安定供給するためJA全農は、原油の輸入と委託精製に着手する。二十日前後から供給を始め、国内元売り会社からの製品と輸入製品に加えた新供給ルートとする。原油価格や為替の変動で、価格引き下げに直接は結びつかないが、精製コストを把握し、元売り会社との価格交渉に生かす考えだ。

全農は石油製品の仕入れを、元売り会社からの購入と製品輸入で対応している。年間の取扱量八百五十万キロリットルのうち、一九九八年度の製品輸入はガソリン、灯油、A重油の三油種で二十万三千キロリットルだった。

今回から輸入に原油が加わる。オマーン原油で、本年度は百五十万バレル（二十三万キロリットル）を計画。五十万バレル（七万九千四百九十キロリットル）ずつ三回に分けて輸入する。オーマン原油は軽質でガソリン、灯油、軽油、A重油が多く取れる。

初回分は五月に船積みし、委託精製先の沖縄石油精製に五日に到着する予定。製品のうち、ガソリン、軽油、灯油などは、系統向けに供給する。供給先は運賃などの関係から沖縄県を含めた西日本地区。そのほか、農業用に使用されないナフサやC重油などは、精製会社を通じて系統外に販売する。

委託精製による系統向け製品は年間十五万キロリットルほどで、全農の全取扱量の二%弱。原油価格や為替レート、ナフサなどの副産物相場の関係で、製品価格がどの程度引き下がるかは明らかでない。

（1999年6月4日付、日本農業新聞）